

第2回 アジア・アジアパラ競技大会に関する懇談会

議事録

1 日時

2023年4月28日（金） 10時00分から11時30分まで

2 場所

名古屋市公館4階 大会議室

3 出席者

奥野信宏（座長）	鮎京正訓	高橋義雄	谷本歩実
藤田紀昭	來田享子		

（五十音順、敬称略）

4 議題

- （1）新たな理念の構築について
- （2）理念の活用・展開について

5 議事録

（1）あいさつ

愛知県
スポーツ局長

皆さん、おはようございます。愛知県スポーツ局長の松井でございます。
本日は、連休前の御多忙の中、第2回アジア・アジアパラ競技大会に関する懇談会に御出席いただきまして誠にありがとうございます。

また、日頃は、アジア競技大会及びアジアパラ競技大会の推進につきまして格別の御理解と御支援、御協力を賜り、この場をお借りしまして御礼申し上げます。ありがとうございます。

さて、この懇談会は、2026年の愛知・名古屋大会開催に向け、新たな大会の理念を構築し、事業モデルをイノベーションすることで、時代のニーズに応えた大会の開催を目指すべく、幅広い分野の専門家の方から助言を求めるために設置させていただいたものでございます。

昨年11月の第1回懇談会では、委員の皆様方から、国際スポーツ大会に求められているものや果たすべき役割などについて様々な観点から御意見をいただきました。非常に意義深い懇談会となりました。

本日の第2回懇談会では、前回の御意見を踏まえ、新たな理念の構築について更に議論を深めていただくとともに、構築した理念をどのように活用・展開し、大会の機運醸成や大会運営に反映させていくべきかなどについて御意見をいただきたいと思いますと考えております。

国際スポーツ大会につきましては、東京2020大会をめぐってガバナンスの課題が浮き彫りになるなど、大変厳しい視線も注がれております。

その一方で、今年3月のWBC、ワールドベースボールクラシックでは、

名古屋市
企画調整監

日本中が熱気に包まれた記憶が新しいところでございます。多くの方に勇気と感動を与える姿、そうしたスポーツの持つ力を改めて強く感じたところでございます。

私どもの大会におきましても、こうしたスポーツの持つ力を最大限に発揮し、新たな時代の国際協調やダイバーシティ&インクルージョンの推進などにもつなげてまいりたいと考えております。

そのためにも、この懇談会でいただいた御意見をもとに、開催都市において新たな理念を掲げ、県民・市民の皆様の幅広い支持と参画意欲をいただくための取組をしっかりと進めてまいりたいと考えております。

委員の皆様には、忌憚のない御意見・御助言をいただくとともに、大会の成功に向けまして引き続き格別の御理解と御支援を賜りますことをお願い申し上げます。

本日はよろしく願いいたします。

皆さん、おはようございます。名古屋市企画調整監の武田でございます。

本日は、お忙しい中、懇談会に御出席を賜り本当にありがとうございます。

愛知・名古屋大会では、選手、チーム役員を始めとした大会関係者、観客の皆様など、多くの方々に愛知・名古屋に集まっていただくこととなります。大会の成功はもとより、この大会を一過性のスポーツイベントに終わらせることなく、ある意味ショーケースとして、大会の開催効果を、スポーツの振興を始め、交流人口の拡大、国際交流の推進、インクルーシブな社会の実現に向け、様々な分野での取組につなげたいと考えております。

第2回の懇談会では、新たな理念の活用方法のほか、様々な社会課題の解決に向けて取り組むべき事項についても御意見をいただきたいと思います。本市といたしましては、いただきました御意見につきまして、本市のまちづくりにどう反映させていくかということもしっかりと考えてまいりたいと思っております。

先ほどスポーツ局長様も触れられておりましたけれども、現在の社会情勢を鑑みますと、大規模スポーツ大会の開催に対して追い風が吹いているとはなかなか言えない状況でございます。

ただ、スポーツの持つ本質的な魅力は全く変わるものでございませぬ。時代のニーズに応じた大会の開催を目指しまして、市民・県民の皆様の御理解をいただくための取組が必要だと考えております。

今日は、第1回の懇談会に引き続きまして、皆様の御意見、御助言をしっかりといただき、大会に向けて引き続きの御理解、御支援を賜りますことをお願い申し上げます。

私の挨拶としては以上でございます。ありがとうございます。

御紹介いただきました奥野でございます。

年度初めのお忙しい時期だと思っておりますが、御出席賜りましてありがとうございます。

前回の会議では、愛知・名古屋のアジア大会の意義等につきまして熱心な議論をいただきまして、有意義な会議だったと感じております。

今回、名古屋市、愛知県でそれらを検討して取りまとめていただいております。

奥野座長

りますので、今日はそれをお聞きして、更に議論を展開していただければと思います。

(2) 事務局説明

事務局より、第1回懇談会の振り返り、大会の準備状況、第2回懇談会の議題について、配布資料をもとに説明。

(3) 議題

ア 新たな理念の構築について

奥野座長

それでは、議論に入らせていただきますが、議題1は、新たな理念の構築についてであります。

事務局から示された視点、観点につきまして順番に御意見を賜りたいと思っております。

鮎京委員、お願いできますでしょうか。

鮎京委員

おはようございます。

事務局から提案された議論の焦点は大変難しい問いかけであると私は認識しておりますが、アジア競技大会、アジアパラ競技大会という、アジアということに少しこだわって、私の考えを述べさせていただきます。

アジアという用語は日々の新聞によく出てくるんだけど、私が大学の教員をやっていたときに、学生に世界地図を配って、アジアの範囲を赤線で囲めと言うと、結構間違えるというか、一番多いのは、インドぐらいまで囲む人です。東の端が日本というのは間違える人はいないけれども、そういうことがよくあります。

後でお話することと少し関わるので申し上げますと、例えばトルコのイスタンブールにアタテュルク国際空港というのがございまして、そこで降りてタクシーで町なかへ向かうと、ドライバーさんが「お客さん、あの海の向こうがアジアです」と言ってきます。つまり、イスタンブールという町はボスポラス海峡を挟んでアジア側とヨーロッパ側に分かれる境と現地の人たちは認識しております。

今日は勉強会ではないので、そんなことを長々と言っているわけにはいきませんが、かつて1950年代に平凡社から『アジア歴史事典』という誠に優れた本が出ておりまして、その後、復刊版も出ておりますので、関心のある方はぜひ見ていただきたいのですが、そのアジアに関する項目の記述が、私がこれまで見た中では一番水準が高いように思います。要は、執筆した人の学力がすごかったということになります。

私はアジアの法律及び政治が専門でございます。2年ほど前に、研究者仲間とアジア20数か国の憲法を翻訳して、『新版アジア憲法集』というのを出版いたしました。

アジア競技大会ということを前にしながら、ぜひ一度考えていただけるといいなと思いますけれども、憲法というのは、言うまでもなく国のかたちを表すものであって、したがって国によって様々であります。この様々であるということが、後で話すことにも関係いたします。

本題であります。

理念を作るということが今日の1つのテーマでありますけれども、何のために理念を作るかという、言うまでもなく、何のための行事を私たちは行おうとしているのかということを外にも内部にも示すためにこそ行うことであって、大変重要だと考えます。

結論を申し上げますと、「アジアの 子どもの 未来の ために」という御提案は私は大変いいと思っております、賛成であります。

さて、政治的な領域からいいますと、今アジアというのは一つではないというのが私の認識であります。つまり、一つではないということは、政治的あるいは法律的、あるいは価値の分野でも対立があるということです。

よく日本政府が、人権・民主主義・法の支配あるいはジェンダーなどを普遍的価値として提唱し、その価値を共有する国々と連携するという言い方をされますが、アジアにはそれに反対の国々もとても多いのです。端的に言えば、中国はもちろんですが、ベトナムであれ、カンボジアであれ、ラオスであれ、ミャンマーも、様々な価値の対立があります。そういう中で、その価値の問題を直ちにストレートに出すというのは、大会を構想する上では非常に問題が出てくると思います。

皆さん方というか、アジアの人たちがこぞって、先ほどの「アジアの 子どもの 未来の ために」というのは誰も反対しない。その内容については様々な思いが、国によって、人々によってあるけれども、反対しないということであり、その意味で、私は、このようなテーマの設定の仕方というのは非常に優れているのではないかと思います、いいと思います。

そこで、このスローガン、標語をどういうふうを実現していくかということについてであります。

1つは、子どもの未来ということであれば、端的にすぐ思いつくのは、保健とか衛生とか教育など、子どもが健やかに育っていくんだという分野が話題になるわけであります。そうであるとするならば、子どもの未来のために、そういう分野について、アジアの国々、人々は、この大会を通じて何を発展させることができるんだろうかという問いかけが必要だと思います。

そこで、そのような事柄をどういう手続で考えるかということですが、1つの案としては、小中高、更には大学生に、君たちだったら「アジアの 子どもの 未来の ために」ということで何が問題で、どういう問題を解決したいのかを問いかけることが必要だと思います。

最後に述べた部分は、事務局の方々に相当御尽力していただかないといかんわけですが、学校関係者等とも相談しながら、そういう問題について現場では非常に多様な意見があり得ると思うし、相当積極的な意見も出てくるように思っております。

奥野座長

どうもありがとうございました。

高橋委員

続きまして、高橋委員、お願いいたします。

高橋です。第1回目で提案させていただいたとおり、皆さんからいろんな御意見をいただいて、ありがたいと思います。ぜひもんでいただきたいと思っております。

私も鮎京委員のおっしゃることは共有認識として持っております。

やはり大会全体、ONE ASIA というものが多少暴力性があるというのかな。何というか、価値の対立とか多様性、ダイバーシティという意味でいうと一くくりにまとめられないアジアだからこそ、会話や価値をお互い認め合いましょうという意味での ONE ASIA であればいいと思うんですけども、使いようによっては非常に危険なワードかなと思っているところもあって。あえてそこを外して、誰もが、次の世代の子どもというのは愛すべき対象として、かつ時空間の未来というものをアジアというエリアで考えてみないかということで提案させてもらったものです。

そういう意味でいうと、アジア・アジアパラ大会自身は、あくまでも人々がスポーツという共有コミュニケーションによって集まる場を作っていくのであって、その場を使って多くの人たちが出会い、語り合い、様々なアイデアや意見をすり合わせたり、対立でもいいですが、理解し合うというプラットフォームになればいいのかなという、場づくりを我々が提供しますという姿勢がいいのかなと思っていまして。その姿勢を見せることで、ひいては社会課題の解決というところにつながってくる活動が生まれてくるんじゃないかなと思っています。そういう意味でいうと、鮎京委員のアイデアに全く賛成です。

例えば教育。教育委員会含めて、小中高大学、専門学校を含めた、次の世代を担う人たち、子どもたちがまさしく主体的に、自分たちがどうあるべきか。もっとアジアを知ろうよというムーブメントになってほしいと思いますし、今の大人たちは、例えば行政であれば、全庁的にこの理念に基づいて、自分の部署であればどんなことができるのかなという。具体的にいうと、予算編成の中にも、施策や事業の落とし込みの中で、まずこれを考えてみてよというようなところに持ち込めるのではないかとあったり。企業、民間団体にも、こうしたテーマであらゆる活動に関していろんな意見を出してみてはどうかという場を我々は提供したいと思うんだというような事業の展開があるのではないかとと思っています。

先ほど事務局から御提案あったような理念であり、ある種社会課題解決のためのムーブメントのためのロゴなり展開というのをすると、本大会のロゴマークとは違った、全体的なムーブメントにつながるのかなと考えているところです。

具体的などころでいうと、もう時間はないわけですが、様々なイベントやいろんな考えたり交流する会の中で、いろんな成功事例を SNS とかを通じて多言語で発信していく。これからのデジタル社会に向けた活用をすることが、今の子どもたちのコミュニケーションは、我々のコミュニケーションとは違うツールを使っていますので、そういったものに対しても大人が敬意を持って対応していく大会だよというようなことがいいのではないかと思います。

最後になりますけれども、今年の杭州アジア大会を終えて、いよいよ愛知・名古屋に来るわけですが、例えば今年は日本 ASEAN 友好協力 50 周年というようなことで日本政府も動くわけですから、せっかくアジアの中でいろんなことでコミュニケーションを取ろうとする機会をうまく利用されて、愛知・名古屋はこういう姿勢でアジアの皆さんをお迎えしたい

と、PR の場でも外務省さんを通じて協力体制を取るといいのではないかと
思っております。

奥野座長

どうもありがとうございました。

谷本委員、お願いいたします。

谷本委員

おはようございます。谷本です。よろしくお願いします。

私から社会課題の解決ということで、アスリート目線にはなるんですけども、アジアを巻き込んだ仕掛けということで2つ提案させていただきたいと思っております。

先日の JOC の理事会でも本件について話をさせていただいたんですけども、選手村というものがない代わりに、何で選手たちのつながりを担保していけばいいのかという点で、1つ目の提案として、アジア大会、アジアパラのアスリート委員会を設置してはどうかという点についてです。

今後 OCA のアスリート委員会とのコラボレーションというものがかなっていくと、アジアに対する発信力、メッセージ、また、子どもたちに届けるといったルートもできるのではないかなと感じております。

現在、OCA 加盟 45 か国と地域のうち、38 にアスリート委員会が設置されておりまして、OCA のアスリート委員長も日本の小谷実可子さんがされているので、この点については非常に太いパイプがあるのかなと思っています。

また、今回のアジア大会にはロシアやベラルーシの選手も恐らく出場するのではないかなと思っておりますが、この可能性があることも含めて、アスリート同士の何かしらのつながりで、社会に対しての課題解決という部分で力になっていけたらとも思っております。

また、2つ目になりますが、アジアの未来の子どものために、また、愛知・名古屋の子どものために何かできないかなという目線になったときに、やはり子どもの参画というものは非常にレガシーになると感じております。実際、自分自身もそうだったというのが記憶に残っております。

その中で、愛知県といいますと、金メダルのが、前回のオリンピックで全国2位になってしまったんですけども、それまで全国1位だったんです。それだけ活躍してきたアスリート、選手たちがおりますので、愛知県のアスリートの活用といった意味でも、こういった取組に結びつけられたらと思っております。

コロナ後の体力低下といった意味では、子どもだけでなく、一般の方々の健康であったり、また、スポーツを通したウェルビーイングといった部分にも、課題解決として何かしら関わっていけるのではないかなと思っております。

以上2点になります。よろしくお願いします。

奥野座長

ありがとうございました。

続きまして、藤田委員、お願いいたします。

藤田委員

藤田です。私からは2点お話しさせていただきたいと思います。

まず1点目は、この理念の中にはスポーツという言葉が出てこないです。でも、やるのはまさにスポーツの大会です。

鮎京委員とか高橋委員からも出ましたけれども、様々な国があって、価値観の違いがあって、それがぶつかり合うのではなくて、お互いにせめぎ合いながら、落としどころというかお互いを認め合っていくというところが必要かなと思っています。そういうことを考える機会になります。

また、スポーツの場であれば、そういったことを超えて、お互いにリスペクトし合うということができると思います。谷本委員から出ましたけれども、ロシア、ウクライナの選手が来ても、スポーツの中であればお互いにリスペクトし合う。それがスポーツのよさであり、スポーツの力と言えるのではないかと思います。問題に目隠しをするということではなく、お互いにしっかり見詰め合って、理解し合っていくという機会が、アジア大会、アジアパラ大会になればいいのではないかという理念。スポーツの力というものが理念の中に入っているということを打ち出すべきではないかなと思います。

2つ目は、私の愚痴になってしまうかもしれませんが、古い話で、長野オリンピック・パラリンピックの招致が決まったときに、行政のトップや幹部はほとんどパラリンピックということを知らなかったんです。更に、当時は監督官庁が違ってしまっていて、ディスコミュニケーションも見られて、運営面でもいろんな問題が生じました。開会式のときに、障害のある方たちをエアコンも何もないところで2時間ぐらい待たせて、体調を悪くさせてしまうとかいったようなこともありました。選手村も、バリアフリーがそれほど十分には行き届いていないというところがあったように聞いております。

それから四半世紀たった今の準備状況を見ていると、そのときと非常に似ていると私は感じざるを得ないです。

東京オリンピック・パラリンピックのときには、多様性と調和という大会コンセプトがあって、障害者のみならず、多様な人を包摂していこうとする態度と熱意と実行力というのが見られましたが、今のところ、まだそういったところが感じられないというのが私の実感です。そのためにも、やっぱりダイバーシティ&インクルージョンに関するコンセプトは理念の説明の中にきちんと明確に位置づけておく必要があるのではないかなと思います。

アジアの子どもと言ったときに、皆さん、どういう子どもたちを連想しますか。肌の色が違う子ども、日本の子ども、いろんな子どもを想像すると思うんですが、障害のある子どものことを連想した方は少ないじゃないかと思うんです。

そういった意味でも、「アジアの 子どもの 未来の ために」という言葉が示す方向性、先ほど見せていただいたスライドの 12 でしたか、括弧の中に持続可能な社会やダイバーシティ&インクルージョンと書いていますけれども、これをもうちょっときちんと、括弧から外に出して位置づけていただきたいと思います。例えば、持続可能でダイバーシティ&インクルージョンが実現された社会を目指すという書き方で、明確にこれを打ち出していくことが必要かなと思います。

理念に関しては、以上の2つを述べさせていただきました。

奥野座長

ありがとうございました。

続きまして、來田委員、お願いいたします。

來田委員

おはようございます。よろしくをお願いいたします。

この言葉自体は、多くの方が共感するいい言葉だな、あるいはノーを言わないと先ほど鮎京委員が御指摘になっていましたけれども、そういうものだと思います。

ただ、ちょっと気になるのは、「子どもの未来のために」という表現の中のどこに注意が払われて政策が作られていくかということです。場合によっては、非常に狭いターゲットセッティングで物事が進んでいく可能性が若干あるかなと思うところです。

つまり、私たちは今この議論の中で、子どもの未来ということで社会の全体像を考えているわけですが、「子どもの」というところに引っかかってしまうと、子どものためのイベントばかりをやることでこの理念が達成されていくかのような思いになってしまうというようなことは、あり得るのではないかということです。

東京大会のときの例でいえば、多様性という言葉を使ったときに、障害のある方々のことについては、パラリンピックがあるから一定程度意識できたけれども、ジェンダー平等は意識できなかったということと似たところがあります。そのようなことにならない作り方が必要で、これは「未来」とい言葉についても同様だと思います。

もう1つは、「アジアの」ということに領域が狭まってしまう可能性もあります。アジアは世界に対して何ができるのかという問いかけがアジア大会から発せられることによって、オリンピックムーブメントの中の一部の大会であるということの連続性とか存在意義ということが出てくるだろうと思います。アジアの子ども、という表現をしたときに、そうしたメッセージ性がうまく表現できなくなるかもしれないということも少し懸念します。

したがって、この言葉をいじるというよりは、先ほど藤田委員もおっしゃったように、理念の説明の文書の中にこうした懸念を払しょくするような表現を必ず入れておくことが必要かなと思います。

そして、愛知県あるいは名古屋市で開催するという観点から、県、市が今後目指していこうとしているスポーツ政策との関係性を考える必要があると思います。恐らく、今後も国際的なスポーツイベントを招致することが想定されていると思います。そして、それをインバウンドや地域づくりに生かしていこうということを構想していると思います。したがって、今後、承知を目指す国際スポーツイベントとの連続性を担保できるストーリーをこの言葉で作れるようにする、ということも視野に入れる必要があると思います。

理念ですから、そう簡単にはころころ変わっていくべきものではありませんし、アジア大会は前の大会から次の大会に引き継がれていくわけで、その中の途中の表現であるということを強く意識したような形でこの言葉を使っていく必要があると思います。

ロシアとウクライナの選手がアジア大会に参加するという形になったと

きに、この大会は世界からこれらの国々の選手の参加という視点からも見られる大会にもなるだろうと思います。そういう意味では、国際的な政治においてはいろいろなことがあるけれども、子どもの未来イコール平和ということをお大切にしようとするための議論の場所、対話の場所にアジア大会がなっていくのだという発想が欠けると、アジア大会は、ロシア、ベラルーシの選手に特別な厚遇をした大会になるという見方しかできなくなってしまい、大会の位置づけが矮小化されてしまうおそれがあるだろうと思います。そうではない、より大きな視点から平和を求める大会にするんだというメッセージ性は、恐らく今大会について非常に重要なものになるだろうと思っております。

ということで、いろいろと言いましたけれども、1つは連続的ストーリー性。この大会の理念ではあるんだけど、前の大会から未来の大会に引き継いでいくストーリー性を抑えた言葉の説明をすること。それから、ターゲットが狭くなってしまわないようにすること。そして、アジアからのメッセージ性を持たせるということ。この3つをこれらの言葉の説明の部分に加えていただくことが必要ではないかと考えます。

奥野座長

どうもありがとうございます。ひとあたり御発言いただきました。

私も、「アジアの 子どもの 未来の ために」は基本的な理念として妥当だと感じております。

理由は大きく2つありまして。

1つは、前回の会議でも、多様な視点から発言をいただいておりますが、それを広く包含できる理念だということ。第2点は、愛知県民・名古屋市民の方々は当然ですが、国民はもとより、アジアの皆さんに共感していただけるのではないかと思います。世界の皆さんにも、アジア大会がこういう理念で開かれるんだ、あるいは開かれているんだということについて御理解いただけるのではなかろうかと思えます。

私、前から気になっていたんですが、「アジアの 子どもの 未来の ために」は良いと思いますが、来田先生がさっきおっしゃったことと関係しますが、英語でどう訳していくかというところが大切だと思っています。私にはそういう微妙な英語の表現を議論する能力はありませんけれども、事務局でよろしく願いいたしたいと思えます。

1つ目の議題についてはよろしゅうございますね。

それでは、2つ目の議題に移りたいと思えます。

イ 理念の活用・展開について

奥野座長

議題2、理念の活用・展開についてであります。もう既にこの中に大分入ってきていただいていると思いますけれども、引き続きこの議論をよろしく願いいたしたいと思えます。

恐縮ですが、これも鮎京先生からお願いします。

鮎京委員

先ほどの私の発言で両方とも話したつもりなので、改めてお話しすることはありません。一通りのお話を聞きながら、やはり最も問題提起的だなと思うのは、今話題になった、来田先生が言われたアジアが世界に発信するものは何かという問いかけです。これが大事だということはわかるんだ

けれども、例えばどういうことでしょうか。

来田委員

これは私のイメージです。

後ほど、課題2の議論したいことで少し触れようと思っていたんですけども、基本的にアジアから発信できることの一つとして、世界的な関心事であります持続可能な社会に対することがあります。

スポーツイベントでカーボンフットプリントの試算がうまくいっていないことは、スポーツ組織そのものも認識していますし、国連の経済社会局からも政策提言として指摘されているところでもあります。こうしたことについてのチャレンジを、ものづくりの町である愛知・名古屋を基盤にしたアジア大会でやるということについては、アジアからの新しいチャレンジ、あるいは世界へ向けて呼びかけるべきチャレンジとしてやっていけるのかなと思っています。

鮎京委員

よくわかりました。そういうことであれば、それは積極的に加える必要があると私も思うし、アジアから世界に発信するものとして妥当なものだという気がします。

奥野座長

どうもありがとうございます。

来田先生はまた後ほどよろしくお願いします。

高橋委員。

高橋委員

ありがとうございます。

今の来田先生の御発言のことも含めて、「アジアの 子どもの 未来の ために」だと包含できると思います。その中で持続可能性はものすごく大事ですので、そういった御提案もぜひ出してほしいという、先ほど来田先生がおっしゃるとおりで、狭くこの言葉を捉えた施策とか活動にならないようにという説明文は私も大事だなと思っています。

あなた方の活動でいろんなことがこの言葉に関われますよねというぐらいいに、皆さんの積極性を引き出すような理念なんですという説明をしておかないと。私はアジアで競技もやったことないし、関係ないわとならないような説明はぜひ必要だなということは認識しました。そのとおりだなと思いました。

私も先ほどの発言の中で議題2の中身も少し話したので、あえて言うのであれば、例えばデジタル化をこのムーブメントの中でどういうふうに。日本は遅れているなんて言いますがけれども、アジア・アジアパラ競技大会発の技術とかデジタル化というものが新たに交流だとかコミュニケーションになるんだとか、あとは移動とか。

今年のカタールのワールドカップなんかでは、ハヤカードという、入国から観戦のチケットから、ホテルについて、全部一括でできるようなカードがあるわけです。

入国して日本全国がパス化できるみたいなことなんかも含めて、いかに人が動きやすい、交流しやすい、ハードルがないみたいなことをしてあげるか。あとは、愛知・名古屋も含めて、今住まれているアジアの方、海外の方がいかにスポーツに親しめるようになるのかというのを、定点的にちゃんと変わっていくのを見せてあげるとかいうことを同時並行的にやっていかないと、やっぱり子どもの未来のためにはつながらないということが

ありますので、かなり広くアイデアを募集して、その活動を支援していくのがアジア・アジアパラ競技大会の活動ですよという。事務局にはかなり難題を言っているかもしれませんが、そのマネジメントが大事じゃないかなと思います。

奥野座長

ありがとうございました。

谷本委員、お願いいたします。

谷本委員

ありがとうございます。

來田先生のお話にもありました、アジアという狭き門にしなくてというところで、逆に、更に狭くしてしまうんですけども、県民の方々にも広く参加していただきたいという思いからちょっと絞り込みまして。

例えば私であれば、安城市出身なので、安城市の子どものために何かできるかということを、当事者意識を持って、実際に今すぐにできることを一つずつつなげていくということもアイデアかなと思います。スポーツに限らず、安城の人がどんなことができるのかをそれぞれ考え、それぞれ実行していくことにつながっていったらいいなと思っております。

漠然とした状態で、どのように携わっていくのかと投げかけたところで困ってしまうんですけども、自分にできることは何かなというところを絞っていくと、高橋先生が言われたように個の活動というものが広がっていくのではないかなと感じました。

奥野座長

ありがとうございました。

続きまして、藤田委員、お願いいたします。

藤田委員

私は、2の展開の仕方というのは2つあって。

1つは、一番大事なのは、組織委員会、あるいは愛知県・名古屋市で、ここに関わっている人の意識がそこにしっかりと根づいていくことを目的にして仕事をしている、そこを目指しているんだという意識を持ってもらうことがすごく大事じゃないか。それぞれの方がやっていく1つ1つの仕事の積み重ねが理念の実現につながっていくと思っています。

先日、組織委員会の方のお話を聞く機会がございました。パラのスポーツに関していうと、知識も経験も全くない、どうしようか。でも、一生懸命やりますという熱意だけはすごく伝わってきました。こういう理念、ここを目指していくということがあれば、皆さんがそのために何をしなきゃいけないかという1つ1つの課題が、そんな簡単なことではないと思うんですが、クリアされていくんじゃないか。まずはこれに関わる人たちの意識の中にこれを展開させることが大事じゃないか。

先ほど、長野パラリンピックのお話をしました。そのときには、文科省、厚労省の管轄の違いがあって、いろいろとディスコミュニケーションがあったと聞いております。今回も、組織委員会、愛知県、名古屋市の三者が一緒にやっていかなければいけない状況だと思います。やはり同じ方向を向いていないといろいろと問題も出てくると思います。連携もしにくいと思いますので、まずは、そういうコンセプトを、組織委員会、愛知県、名古屋市で仕事に関わっている人たちの中に展開させていく。

もう1つは、大会の中での展開の仕方をどう社会に波及させていくかというところだと思います。

これはいろんなやり方があると思います。東京オリパラの展開の方法なんかも非常に参考になるんじゃないかと思います。子どもということで、そこに制限するのはよくないというお話がありました。でも、子どもたちってすごい可塑性があって、小さいときにいろんな経験をしておくのはすごく大事なことで。

パラに関していいますと、パラ競技に出た子どもたちあるいは体験した子どもたちの意識というのは、1年たっても変わらないという私どもの調査結果が出ております。ですから、近道ではないかもしれませんが、子どもたちの未来が変わっていくためには、やはり子どもたちに対していろんなプログラムを展開させるのは重要なことだと思います。

これをやろうと思ったら、今予算化していかないと手遅れになってしまいますので、子どもたちにどう関わってもらおうかということは早急に考えていくべきじゃないか。単に動員で見てもらっただけではなくて、ボールパーソンをやってもいいし、いろんなボランティアで関わってもらおうということもあるでしょうし、どんな関わり方ができるかというところを広く議論して、子どもたちにも関わってもらおうということは必要じゃないかなと思っています。

とにかく早く開催都市契約を結んでいただいて。そこからじゃないといろんなものが動きませんから。何でもかんでも向こうの言うことをのみ込めと言っているのではなくて、できないことはできないで仕方ない、やるのが大事だと私は思っています。それがないと、ほかの展開がますます遅れてしまうと思っておりますので、早くその部分を。皆さんぎりぎりのところでお仕事をされていると思うんですけども、契約を済ませて。

オリパラのときには、関連の閣僚とか小池知事とかがパラリンピックの成功なくして2020の成功はないということを口々に言っていただきました。河村市長とか大村知事にも、早くきちんとみんなの前で、県民・市民の前でも、国民に向かってそういうことを言っていただきたい。それによって、関わっている人たち、特に行政で関わっていく方の意識も変わっていくんじゃないかなと思います。

奥野座長

ありがとうございます。

来田委員、お願いします。

来田委員

私の場合は、3つのフェーズに区別をしながら、この理念を伝えていく方法について考えたらいいかと思います。これはオリンピックムーブメントでも近年採用されている手法となります。

1つは、組織委員会内部。

先ほど藤田先生もおっしゃいましたが、組織委員会内部でこの理念をどのように確認しながら前に進むかということになります。例えば東京大会の組織委員会では、いろんなビジョンとかミッションとかはあるけれども、それを広報活動するだけ。この大会の理念はこういうものです、と知らされ、発信していくことはするんですけども、それを自らのスタンスで考えるという機会、ワーキンググループを作るとか、あるいはグループディスカッションしてとかいうことはあまりやっていなかったと思うんです。

どうしても目の前のことに追われてしまいがちなので、半年に一遍ぐらい、組織委員会はそれぞれ専門性のある部署の集合体ですから、その専門性の観点から見たときに、この理念に対して今自分たちは何をしているのか、この先何ができるのか、何が難しい課題になっているのか、それは他の専門性とながれば解決し得ることなのかという、理念を中核にした情報共有の場を組織委員会の中で定期的に持っていただくことはどうかなと思います。

2つ目になりますけれども、これはスポーツ大会が社会に与えていく影響というフェーズであります。

やっぱりスポーツの大会ですから、スポーツ関連組織のネットワークにどのようにしてこれを共有してもらうかということになると思います。そのためには、愛知県のスポーツ協会あるいは名古屋市のスポーツ協会という日常的な活動をされている組織、そしてそこに加盟する競技団体。最近では総合型の地域スポーツクラブがここの連携を深めようとしています。これは外部指導者の関係ですので、学校ともつながっていく部分ということで、これらのスポーツ関係組織への理念共有の場というのを設けて、議論する場を設け、自分たちがこの理念の実現に向けて何ができるか、組織委員会は何をすべきかなどについて意見を出していただく。大会準備はこうなっていますじゃなくて、この理念について皆さんどう考えますかということで参画していただくようなフェーズを作る必要があるかと思います。

そして、3つ目は社会にということになります。

身近なところでは県民・市民ということになりますけれども、このメッセージが最終的にはアジア、世界に広がっていくものと考えする必要があります。

この地域でできることとしては、学校教育の現場です。大学までも含めた学校教育の現場でこの理念について考える、アジアについて考える機会を持つということです。

これまでのオリンピック、パラリンピック教育の限界と言われているのは、大会を盛り上げるための教育をしたことであると思います。機運醸成という言葉が非常に危険でして、大会さえ成功すればいいんだということで、非常に薄っぺらな大会に対する議論だけを盛り上げることになってしまいます。それは非常にもったいないです。

大会には光も影もあります。アジアに光も影もあります。この光と影の両方を見て物を考えて、未来と一緒に考えるような教育としての、アジア大会をきっかけにした考え方。

いわば、大会のことはほっておいてもいいかもしれないです。アジアについて学ぶ教育をすることでアジア大会に興味を持つということでもいいと思うんです。そこの順序を間違えないようにした教育というのは必要なのかなと。

それから、東京大会のときにうまくいっていなかったと思うのは、様々な社会に対して働きかける行事ごとをイベントという形で捉えていたことです。日本人の言葉のイメージだとは思いますが、イベントは非

常に短期的、単発的な印象があるんです。そうじゃなくて、この頃の海外のスポーツ政策文書を見ていると、キャンペーンという言葉が多用しております。キャンペーン、つまり持続的に働きかける、ムーブメントのための起爆剤になるような行事のあり方ということですので、ちょっと発想を転換して、言葉の使い方を変えるだけで違ってくるかなと思いますので、そうしたことを検討してはどうかと思います。

そして、カーボンフットプリントに関しては、先ほど申し上げたとおりであります。

最後に、スポーツ庁がスポーツ施設のユニバーサルデザインに関するガイドブックを出しました。非常に厚みのあるもので、こんな全部できないよということがあると思います。今からこの大会に向けての施設をあのスタンダードにそろえていくのは非常に難しいです。お金もかかります。あのガイドブックにあるソフト面のところ、人的なつながりあるいは組織的なつながりがないと完成しないユニバーサルデザインのあり方というのがありますので、愛知・名古屋という町がそうしたユニバーサルデザイン化を促進するという形でアジア大会を迎えつつ、その先にある政策もそこにセッティングしていくという考え方はあるのかなと思っています。

奥野座長

どうもありがとうございました。皆さんからひとあたり御発言いただきました。

私、前回の会議で、交流・連携が新たな価値を生むという発言をいたしました。交流・連携のダイナミズムという表現をしたと思います。ここ 20 年ちょっとでしょうか、国土政策、地域政策に関わってまいりました。その基本理念として、具体的な施策を議論・検討するときにはいつも頭に置いてきたところです。交流・連携のダイナミズムは、ハードの施策では、交通・都市インフラの整備等々ですが、私が主に推進してまいりましたのは、ソフトの施策としての人のつながりの構築です。

これにはいろいろな姿があります。狭い地域の例えば町内会や集落での人のつながりは、田舎でも大都市圏でも高度成長の過程で衰退してきました。地域の活性化や防災減災のためには、その再構築が必要だと感じてきて、NPO 等の育成やそれに関連した活動を行ってきました。広域的な人のつながり、国境を越えた人のつながりは、民間企業は自主的にやりになるし、行政の政策としても随分展開されてきておるところであります。

突然具体的過ぎる話になって恐縮ですが、愛・地球博のときに、各国と自治体との連携事業が、子どもさん達も含む形でいろいろ行われてきて、この地域はかなり経験を持っていると思いますので、そうした成果も酌み取りながら、アジア大会の具体的な事業にもつないでいただきたいと感じております。

まだ約束した時間には少し余裕がありますので、更に追加して御発言。

高橋委員、お願いします。

高橋委員

これは気の回し過ぎかとは思いますが、先ほど御説明の中で、マーケティング代理店の決定方法についてということで、新たな仕組みを含めてということで提案を求める資料が出ております。

今回の懇談会がどういう位置づけになるかということとも関連しますが、例え、例えば今日話したような理念の話が、包含的で、ある種日本のお祭りのような、多くの人たちを巻き込む活動につながる理念というものが組織委員会さんで採用になる、ここで言う採用になるのかわかりませんが、という方向であれば、恐らくマーケティングというのは、これまでの流れでいうと、一般的には排他的で、権利や契約で縛って、これは権利のないアンブッシュ・マーケティングだからロゴも使わせないみたいなことになりがちです。

そういう意味で、新たなこういうマーケティングに包含的な理念というものを同時並行的に走らせることによって、排他的な、権利を買う企業さんなんかにも価値が上がるんだという全体像を見せた上で提案を求めないと、これまでどおりのことをすると、我々が幾ら理念を話しても、そういう活動をされては困りますという組織委員会になってしまうと、この議論とは全くかみ合わなくなりますので、ちょうどオブザーバーで来られているので、そういったこともぜひ連携されて、方向性を同じように、密なコミュニケーションを取っていただければと思います。

ここまで言う必要はないかもしれませんが、感じたところでございます。

奥野座長

ありがとうございました。

続いて、藤田委員、どうぞ。

藤田委員

1回目にももしかしたらお話ししたかもしれないですが、オリンピックで有形のレガシーをずっと作ってうまくいったというのは、バルセロナオリンピックとロンドンオリンピックと言われています。駄目だったのはアテネと言われています。

これ、何が違っていたかという、アテネは大会のためにいろいろ準備して、大会が終わったらもうおしまいという形だった。ロンドン、バルセロナは、まちづくりであるとか、その中でどう大会を位置づけるかという考え方だったと聞いています。

ですので、愛知、名古屋としてのビジョン、県としてのまちづくりであり教育であり福祉であり、あるいは市としてのビジョンの中でこの大会をどう位置づけて、せっかくやったんだからこれをこうつなげていきましょーと、まちづくり、都市づくりのビジョンの中で展開させていく。そういう位置づけで見ていかないと、レガシーは残らないと思うんですね。大会が終わったらおしまいになってしまうので、それを有効に生かすためにも、県とか市の長期ビジョンの中でこれを展開させる視点が必要かなと思います。

奥野座長

ありがとうございました。

来田委員。

来田委員

ここまでの中ではお話ししてこなかったことですが、やっぱり東京大会の課題は、メディアの方々と情報共有がうまくいかなかったことがすごくあるように思います。

物事を悪くしようとしてやっていた人は一人もいなかったのに、そういうふうでない情報の流れ方をした。あるいは悪意を持って報じようとした

かのように組織側が受け止めるような雰囲気が出来上がっている。これはどちらにとってもよくなくて。それはつまり、情報が市民に正しく伝わらないということになるという点で非常に良くないだろうと思います。

近年のいろんな SNS の利用に関する事件を見ても、たたき文化といいますか、出てきた情報が気に染まなかったら、たたいてたたいて、その人は存在してはいけないような雰囲気になってしまう。言葉の暴力性とかデジタルツールの持つ暴力性とかを大会を運営していこうとする大人たちが変えていかないと、アジアの子どもの未来は来ないとも思うんです。

メディアから批判の批判とは、民主主義社会においては、つまりは市民の声ということですから、市民の声をどのように受け止めて、それをどのように活かしていくか。そして、市民が声を上げられる情報をどのように組織委員会が出していけるかということがものすごく大事なことになるだろうと思っていますので、今の段階から、メディアの方々可能な限りの情報を提供しながら対話をする場所を持つということが重要だと思います。

一方通行の情報提供ではなくて、声を聞くということ。そして、関係者がいつでも自分のスタンスで質問されたことに答えられる。東京大会のときのように、理事の方はそもそもきっと話してくれないだろうからと、取材自体に行かないという。谷本さんはよく御存じだと思いますけれども、そういう雰囲気を作ってしまったは何の意味もない。話せることをどんどん話して、対話していくという空気感を作っていく。そういう社会にしていくというフェーズを今大会の中にぜひ入れていただければと思います。

奥野座長

ありがとうございました。

鮎京委員

鮎京委員、お願いします。

今日委員の先生方のお話を聞きながら、少し気づいたことがあって。

先ほどから、この大会をやる意義は何かということで、理念の問題をずっと論じてきた側面があるんですけども、もう1つ考えるべきなのは、アジアの国々とかアジアの人々が愛知・名古屋でやるのはおもしろいなどということも実は理念論の中に入ってくるのではないかということを感じました。

将棋の藤井さんが、ベトナム中部の町、ダナンで今度対局をやりますよね。ダナンというのは、もともとベトナムの歴史では、キン族という多数民族の支配地域ではなかったんです。あそこはチャンパ王国というのがあって、チャムの人たちの町で、行ってみるとわかりますけれども、様子の全く違うところにキン族が侵略してチャムの人びとを追い出した地域です。ダナンから少し南へ行くとホイアンという町がありまして、これには御存じの日本人町があって、歴史の中で、御朱印船時代に日本と安南をつなぐ交易船が往来していて、いろんな文物がやり取りされた町です。

ダナンと聞いたとき、私は何回も行ったことがありますけれども、本当に将棋を見に行きたいと思ったんです。それは、今言ったように、日本とのつながりが強い場所であるし、あれを企画した人はすごいなと思ったものですから。

申し上げたいのは、アジアの国々の人々が、愛知・名古屋でやるなら行

ってみたいと思う理念をどういうふうにするか。論点の提示だけですが、そんなことを思いました。

奥野座長

ありがとうございました。

ほか、いかがでしょうか。

谷本委員、お願いします。

谷本委員

鮎京委員の今のことに、ぜひ私も頑張りたいという気持ちですけれども、大会成功に、やはり参加した方の満足度は必ずつきものだと思うんです。

母国へ帰って、「アジア大会すごかったんだよ」「愛知県すごかったんだよ」「名古屋すごかったんだよ」というのは、恐らくたくさんの方に届くでしょうし、子どもたちも、そんな大会に、僕、私も出てみたいなんて思えば、これは大成功だと思います。

その中で、成瀬さんの報告書をこの間読ませていただいたときに、シティ・ドレッシングというところが選手たちに届くモチベーションの中でも非常に大きな一つだというのは、私自身も実際にこれまでいろんな大会に出てきましたけれども、感じたことで。

実際に、ブラジルのリオであれば、空港に到着したら、首から下げてもらうといった歓迎。北京オリンピックであれば、ぱたぱたとみんなが旗を振って手を振ってくださるんです。「頑張れ、頑張れ」と日本語で言ってくれたりもする。やっぱりそういうのは選手にすごく届く。そういったものを作り上げていくというのはすごく大切じゃないかなと思っておりまして。

今回、東京オリンピックのときに選手村にありましたけれども、コロナ禍で、これまでの大会と違う選手村のあり方という部分では、装飾というのが選手の心に届くというので、各国非常に力を入れていました。例えばオーストラリアは外にバリスタを呼んでカフェを設置したり、また、イギリスであれば電話ボックスといったもので選手たちの心の部分に、自分の国の応援という、ホームの部分表現していたり、いろんな部分で取り組まれているところがこれまでの大会との変化で感じた部分でした。

今回、選手村がなくなるということで、この取組をぜひ町の中に作っていただけたら、恐らく参加した選手たち、また、スタッフ、役員、そして応援に来られた方々にとってもものすごく思い出につながる、満足度につながるのではないかなと思って、共感させていただきました。

奥野座長

ありがとうございました。

私も、鮎京先生、谷本委員おっしゃったように、愛知・名古屋の本当のよさを知っていただけるいい機会だと。

私はまちづくり等々を長くやってきまして、名古屋というのは本当にしゃれた、すばらしい町になっていると感じています。名古屋というのは東京の知識人から皮肉を言われやすく、名古屋人もそんなのかもしれないと自虐的になっていくところがあります。

私のところにいろんな方がいらっしゃいますけれども、遠くからいらっしゃるときに、飛行機の便が不便だということもあって、ちょっと早目に来て名古屋の町を見てから都市センターに来られることもあります。名古屋はものすごくしゃれていますよねという感想をよくおっしゃる。

客観的に見るとそうだと思うんです。しゃれているという言葉だけでいかどうかは知りませんが、非常にいい町になってきているなと思うことがあります。

今年、アメリカの「タイム」で世界のすばらしい場所 50 選に名古屋が選ばれていましたが、客観的に見て首肯できます。愛知・名古屋の本当の姿、すばらしさ、いろんな面もあるんですけども、それを知っていただけるいい機会にしていいただければと感じております。

高橋委員

ほか、御発言はございませんでしょうか。

谷本委員のお話に、私も同感です。

今後、恐らく未来にかけて大きな変化というのは、愛知・名古屋も含めて、日本に住む外国人の方、アジアの方が増えるであろうということは考えられます。

そういう意味でいうと、現在もう既に愛知・名古屋にお住まいの方々の御意見、母国がアジアにあって名古屋・愛知に住んでいて、自分たちの国の代表を迎える方々の活性化というのも、恐らく、選手村がない中で自分たちが自分たちの国の旗を名古屋市内で立てられる、その国の料理が出ているみたいなことを自由に展開しましょうよということをする、町なかがかかなり賑わうというか、こんな場所があつて、こんな国もあるんだみたいな新しい発見があるんじゃないかなと思いますので、日本人だけで考えるのではなくて、ぜひ参加させていただいて、みんなで考えるという場を持つといいかなと思いました。

奥野座長

また手間暇が増える形であれですけれども、ぜひよろしくお願いします。

ありがとうございます。

藤田先生、どうぞ。

藤田委員

1 点だけ。

選手村が作られないということは決まったことなので、じゃあどうするか。パラの選手の関係でいくと、医療の問題、輸送の問題、いろんな課題が出てきていると思うんです。

でも、プラスに考えて、ということは町なかにバリアフリーの宿泊所がいっぱいできるんだと、町なかのバリアフリー化が進むんだと捉えて、先ほど言った将来的なビジョンの中でそういう位置づけにしていくなだと捉える必要があるのかな。そのためには、ホテル、業者さんの理解が必要になってくると思います。

東京のときの合宿で、ホテルを改造して、終わったらまたそれを元に戻すということがありました。そうならないように、これは将来的には例えば高齢者の旅行とかいったところで魅力的な宿泊施設になっていくんだというところも含めて、課題解決に当たっていただきたいと思います。

奥野座長

ありがとうございます。

ほかはよろしゅうございましょうか。

今日の委員の先生方の御発言につきまして、事務局からのリプライというのは求めませんで、次回の第3回目の資料に向けて、検討、整理していただければと思っております。

今後の進め方について、事務局からお願いいたします。

事務局

委員の皆様方にはこのたびも大変貴重な御意見をいただきまして、事務局としても感謝申し上げます。

今後のスケジュールについて御案内申し上げます。

次回の第3回懇談会につきましては、今のところ、今年の9月から10月にかけて行われます杭州大会の前後に開催して、中間報告を取りまとめる形でできれぱと考えております。その中間報告をもとにして、更に御意見をいただき、最終的には懇談会としての提言という形で取りまとめていければと考えております。

第3回懇談会の詳細な日程につきましては、改めて調整させていただきますので、今後ともよろしくお願いいたします。

奥野座長

ありがとうございました。

本日予定しておりました議題は全て終了いたしました。

事務局へお返しいたします。

(4) その他

事務局

本日は、長時間にわたりありがとうございました。

委員の皆様方からいただきました貴重な御意見を踏まえまして、今後も事務局として検討を進めてまいります。次回の懇談会につきましても、よろしくお願いいたします。

以上で、第2回アジア・アジアパラ競技大会に関する懇談会を終了いたします。どうもありがとうございました。